

総 括

菅 聡 子

この分科会は、時代・領域を異にする研究者が、テーマ・関心を共有することで、日常の研究活動の場においてはなかなか期待できない相互の交流や、新たな視点の獲得をめざして設定された。加えて、イタリア・アメリカ両国の日本文学研究者をお迎えし、自閉しがちな研究の方法を拓き、対象への多様なアプローチを模索することをめざした。

西丸妙子氏は、『斎宮女御集』にある、斎宮徽子の村上天皇に対する心情が吐露された歌を中心に分析・考察を展開された。発表資料に示された例歌は、ジェンダーの視点の導入により、女性の自己表現としての側面が前景化された。同時に、会場からは、現代の問題意識による逆照射が、果たして作歌当時の時代認識に適用されうるのか、という質問も提出され、興味深い議論となった。カロリーナ・ネグリ氏は、『住吉物語』中の恋愛歌に着目することで、「継子いじめ譚」としての同作の新しい側面を提出された。すなわち、「婚姻譚」の視点からとらえ直すことで、作中の一夫多妻の問題など、「継子いじめ」の背景にある女性同士の関係性が明らかになり、新たな研究の可能性が示された。ステファン・M・フォレスト氏は、「三十一文字の枠にはめられない恋を歌う—感情と歌の構造・長歌から新体詩まで—」というタイトルで、万葉から近代の新体詩にいたる連続性を見出すことを試みられた。藤本恵氏は、金子みすずの詩を一つの事例としてとりあげつつ、女性の童謡詩人をめぐる、いわゆるテクスチュアル・ハラスメントが、どのような批評言説によって形成されているかを論じられ、現在の金子みすず研究のみならず、女性作家・詩人研究全般に及ぶ重要な問題点を提起された。

時代・領域を横断した研究の交流と、また、それが一つの「場」において展開されたことによって、会場全体として、新たな広い視野と問題意識を喚起されることとなった。また、会場とも熱心な質疑応答がなされ、この「場」において獲得された問題意識が、またそれぞれの研究の「場」において新たに結実するであろうことが期待された。当日、ご参会くださった皆様に、この場を借りて感謝申し上げたい。

なお、残念ながらフォレスト氏からは今回原稿がいただけなかった。